

# 雜 報

## 會 員 動 靜

<p>陸軍一等軍醫從六位勳六等 白 玖 壽 雄 任陸軍三等軍醫正 陸軍二等軍醫從七位 佐 藤 一 衛 任陸軍一等軍醫 (三月十五日) 海軍軍醫大佐 村 上 敬 二 待命被仰付 (三月二十日) 岡山醫科大學助教授 大 熊 泰 治 職務俸金六百圓下賜 (三月二十四日) 敘從六位 正七位勳五等 長 谷 川 靜 一 (三月十五日) 陸軍三等軍醫正八位 有 馬 雅 輔 任陸軍二等軍醫 陸軍一等看護長 寺 岡 森 太 郎 陸軍一等看護長 秋 山 彰 任陸軍三等軍醫 (三月二十五日) 岡山醫科大學教授 林 道 倫 職務俸金貳千參百圓下賜 補岡山醫科大學附屬醫院長</p>	<p>岡山醫科大學教授 赤 岩 八 郎 職務俸千九百圓下賜 依願岡山醫科大學附屬醫院長ヲ免ス (三月三十一日) 正七位 田 部 浩 正七位 皆 見 省 吾 敘從六位 (三月十五日) 陸軍二等軍醫 西 村 慶 次 補歩兵第十聯隊附 海軍軍醫大佐 村 上 慶 二 豫備役被仰付 (四月一日) 筒 井 德 光 任岡山醫科大學助教授 敘高等官七等 (四月八日) 岡山醫科大學教授 畑 文 平 岡山醫科大學助教授 北 山 加 一 郎 在外研究中俸給百分ノ四十ヲ支給ス (三月三十日)</p>
---	--

- 畑 文 平 君 曩日文部省より在外研究を命ぜられたる同君は去月三十日當地を出發渡歐の途に上られたり
- 北山加一郎君 曩日文部省より在外研究を命ぜられたる同君は去月三十日當地を出發渡歐の途に上られたり
- 好 本 節 君 歐米各國に出張を命ぜられたる同君は本月十四日神戸出帆の香取丸にて出發せられたり
- 岩 野 俊 治 君 は豫て滿洲醫科大學教授として勤務し居られしが今般其職を辭し暫時東京小石川區籠町五一に於て靜養せらるる筈なり
- 齋 藤 治 君 大正七年岡山醫學專門學校を卒業し岡山縣病院産婦人科に勤務し三月八日岡山醫科大學産婦人科講師を囑託せられ今日に至りしが去月三十一日辭職せられ來五月より新に開院すべき日本赤十字社岡山支部病院産婦人科醫長に就任せらるる筈なり

○高橋喜代松君 は豫て縣立廣島病院に勤務し居られしが今般海軍共濟組合吳病院耳鼻咽喉科に轉勤せられたり

○長谷雄三郎君 は大阪府枚方町倉紡病院に勤務し居られしが今般本縣倉敷町倉紡倉敷工場病院に轉勤せられたり

○田中公明君 は今般愛媛縣温泉郡拜志村に移轉開業せられたり

○小川愛輔君 は今般京都市上京區小山大野町に移轉せられたり

○河野明一君 は豫て大阪市に於て開業し居られしが今般廣島縣士生町に歸郷せられたり

光畑幸雄君逝く 君は明治三十年岡山醫學專門學校を卒業し岡山縣病院産婦人科に勤務し後本縣都窪郡妹尾町に於て開業し居られしが去月下旬病を以て遠逝せられたりと洵に哀悼に堪へず謹みて茲に弔意を表す

◎**筒井徳光君略歴** 別項の如く今般岡山醫科大學助教授に任ぜられたる筒井徳光君の略歴は左の如し

大正九年十二月東京帝國大學醫學部卒業

同十年一月同醫學部副手を囑託せられ眼科教室に勤務

同十一年四月縣立廣島病院眼科部長を命ぜらる

同十四年七月岡山醫科大學眼科學講師を囑託せられ今日に至る

◎**新卒業生消息** は左の如し

市村丑雄君 鐘淵紡績絹絲工場勤務

伊藤駒夫君 岡山醫科大學柿沼内科勤務

劉 雄君 岡山醫科大學眼科勤務

大田原一祥君 岡山醫科大學柿沼内科勤務

横山秀三君 和歌山赤十字社支部病院勤務

永山太郎君 大阪歩兵第八聯隊一年志願兵

福田 豊君 岡山醫科大學柿沼内科勤務

山口節郎君 深草歩兵第九聯隊第二中隊一年志願兵

佐藤國男君 岡山醫科大學解剖學教室勤務

廣田照輝君 久留米歩兵第四十八聯隊第六中隊一年志願兵

森 長 秀君 日本郵船株式會社勤務

◎**卒業生** 岡山醫科大學にては去月二十五日左記二十六名の卒業生に對し卒業證書を授與したり

市村丑雄	伊藤駒夫	井手又藏	劉 雄	大田原一祥	音田徳太郎
加藤暢	吉田豊太	横山秀三	田端健久	佃 毅	永山太郎
村山高	上野博	熊本正熙	山口節郎	松森明	福田豊
新 勇	佐藤國男	佐伯純一	菊田兵三	宮田貞二	廣田照輝
森長秀	勝呂學				

◎ 獨逸國巡歴

關 正 次

上

ここは獨逸西部のギーゼンと云ふ人口三萬ばかりの靜かな町である。私のいま泊つてゐる「ホテル」は驛に近いが別に騒しいこともなく、電車の響と牛の聲とがこもごも聞えて来る。室は清潔で、食物もよく、あはただしく獨逸巡歴の半ばを過して来た私の暫く靜養するにはよいところである。

今日は二月十三日、日曜日で、空は少しの雲もなく晴れてゐる。こんな天候はキールでは極めて稀であつた。殊に秋から冬へかけては太陽を見ることも少く、終日空は雲に覆はれて、屢々雨が降つてゐた。

キールの解剖學教室の人々に暇乞ひしたのは一月二十九日であつた。メーレンドルフ教授に八月間厚い世話になつた禮を云はうとしたら、離愁に堪へず、熱い涙がぼろぼろとこぼれて何も云へない。教授は「わかつてゐる、わかつてゐる」と云つて慰めてくれた。そして記念に次の如く書いて與へられた。

Bewahren Sie an Deutschland und an die Insassen des Anatomischen Instituts zu Kiel ein freundschaftliches Gefühl. Auch wir werden gerne der mit Ihnen verlebten Zeit gedenken. Alles Gute für Ihr ferneres Leben.

(君よ、獨逸國とキール解剖學教室員とにいつまでも善意を持つてくれ。我等もまた君と過した時をなつかしましう。君の未來に希くはすべてよいやうに。)

それから教室員一同が教室の入口に集つて記念の撮影をした。寫眞機械の位置を定めたのも、現象したのもメーレンドルフ教授であつた。出来上つた寫眞は私はまだ見ぬが、メーレンドルフ教授夫妻、ベンニン教授夫妻、スパンナー講師夫妻、ワルダイヤー助手、ナーゲル助手、それに七人の男女技術員、三人の小使が加つてくれてゐる筈である。

キールを立つたのは翌一月三十日、日曜日であつた。宿のパウゼン夫人、ガー老嬢、女中たちとも別れが惜しまれた。驛にはキール滞在の橋本、桂、上原、常盤の四氏が見送つてくれた。

夜九時私が伯林に着くと、田川禪太郎君が迎へて、自動車で伯林西南部にあるブラーガープラッツのヤンソンと云ふ人のところに連れて行つてくれた。ヤンソン夫人は日本人である。主人ヤンソン氏は東京の農科大學で教へてゐたが十年ばかり前に亡くなり、夫人は二人の娘と一人の息とともに數年前獨逸に來たと云ふ。

驛から宿まで自動車はこちよく走つた。車道は滑かで、それに燈火がうつつて美しい。左の林はティアガルテンだと教へられて、いよいよ伯林に來たのだなと今更感を深うする。うれしかつたのは宿に着いてからすぐ田川君に伴はれてそこから遠からぬ藤卷と云ふ家に行つて日本料理を食べることが出來たことである。室内の様式は西様風で、唯壁に日本畫の額が掛けてあるだけだが、食品は全部日本のもので、米の飯に、刺身、吸物、鰻の蒲焼、何でもある。ここに集つて来る者はみな頭の黒い日本人で、「アルコール」の火の上に鍋を据ゑ、じいじいと音たててすきやきをやつてゐる者もある。私は二「マーク」即ち一圓の定食を攝つた。その旨かつたこと。想つてみるがよい。去年四月の末に日本を立ち、獨逸の汽船で、二月の航海のちハムブルグに上陸し、それからキールに在留すること八月、その間一度も日本食を攝らなかつたのである。刺身につけたわさびが鼻を強く刺戟するのもうれしかつた。

一月三十一日、朝食をすますと、すぐ伯林の地圖とベデカー獨逸國案内書と寫眞機とを持つて宿を出た。

乗合自動車でブランデーブルガー門のところに来て、それから広い道ウンターデンリンデン、賑やかなフリードリッヒ街を通り、王宮では善美を盡した装飾を見、カイザーフリードリッヒ博物館では蒐集せられた器物、繪畫等を見た。ティーアガルテンを過ぎ、日本大使館に行つて旅券に佛國、英國、米國等を追加して貰つた。此日は日本人倶楽部と藤巻とで日本食を攝つた。

二月一日の正午頃植物園に、午後は動物園に行つた。植物園には大きな温室があつて熱帯植物が繁茂してゐる。動物園では水族館が殊によい。朝、石田堅三郎君の來訪を受けて暫く語つた。

二月二日、石田君に案内せられて、先づウンターデンリンデンにある大きな圖書館に入つた。整理がよく行届いてゐる。日本にもと羨しい。ツオイグハウスには兵器が陳列せられ、ウイルヘルム一世の軍服も見たが、形が小さかつた。殊に肩の幅が狭いのが目に立つ。これに反してビスマルクの軍服は非常に大きかつた。雨が降り出したので早く歸る。

二月三日には地下電車によつてスタディオンに行く。歐洲戦争の前に造つたもので頗る壯大である。其背後に獨逸體育大學がある。學長のジツプ氏、心理學のジツベル氏、醫員某氏等に會つて設備を見たり話を聴いたりなどしてゐたら三時間半を費し、豫定のプロシヤ體育大學を訪ねる時間がなくなつてしまつた。此大學は私立であつて、學生三百餘人を有し、修業年限は目下三年であるが、やがて四年にすると云ふ。今日本人が三人ほど學んでゐる。體育研究所の松井氏がジツベル氏のところで研究しつゝある。ペンニグホーヴェンと云ふ標本、模型等の製作所を訪ふ。獨逸國では人體の一部を解剖學教室等から得てこれを標本として賣ることを許してゐる。

二月四日、カイザーウイルヘルム勞働生理研究所に所長アツツラー氏を訪ふ。私が正午に行くことになつてゐるので、時を違へずに行くこと、入口のところにアツツラー氏自身が立つて居て私を導いてくれた。質問にもよく答へてくれた。目下體育方面はヘルプスト氏が獨逸體育大學に時々行つて研究してゐると云ふので、私は此人に紹介せられ、それから此人に研究所内を案内して貰つた。仕事と呼吸氣量及び酸素消費量との關係等に就いていろいろ聴いた。最後に研究の活動寫眞を見て、好意を謝しながら研究所を出た。

二月五日、文部大臣の紹介状を持つてスバンダウのプロイセン體育大學を訪ふ。學長のノイエンドルフ氏はいま母が危篤のため不在で、體操教官のシュツツ氏が種々配慮してくれた。運動生理學の方面を擔任するミュツラー氏は私の想像に反して研究を行ふ學者でないやうである。このプロイセン體育大學は官立であつて、修業年限一年、學生は三百人居り、過半が女性であることは注意に値する。此大學は定型の教員養成を主眼として居り、昨日視察した獨逸體育大學は天才教育の傾がある。別れに臨んでシュツツ氏は靜かに「どうぞ此大學を忘れられぬやう」と愛想を云つたが、ミュツラー氏は廊下を走りながら驚いたやうに「さやうなら」と云つた。私が門を出るときミュツラー氏が廊下で大聲に誰かを呼んでゐるのを聞いた。

夜は石田、田川二君とウンターデンリンデンに近くある「アドミラルバラスト」と云ふに行つた。美しい装ひをした女性が多數活潑に踊る。時々滑稽劇もある。雙眼鏡で見ると、全身を極端に動かす強い踊りの後では呼吸を促迫させていかにも苦しさうであるが、多數の觀客はこれを知らぬ。

二月六日、田川君に案内せられて伯林の西方のポーツダムに行く。樹葉落ちて淋しい。

二月七日、伯林大學の解剖學教室を訪うた。先づフィック氏を尋ねたけれど不在であつたので、コープシュ氏に會つたが、講義前で別に交談も出來ず、導かれて標本室に行き、技術員に案内してもらつた。骨髄の標

本がすぐれてよい。再びフィック氏を尋ねると、室から出て来て耳を私に近ける。聲を高くして來意を述べたら、喜んで「カイベル氏が來てゐる、入りなさい」と云ふ。カイベル氏は脊が少し曲り、脚も弱いと見えて杖をついてゐた。ここに期せずして獨逸解剖學の兩巨頭と同室したのは愉快であつた。フィック氏はペンニング氏から、カイベル氏にはメーレンドルフ夫人からの挨拶を傳へた。「標本室は見たが、尙ほ私は關節機械學に興味を持つてゐるから、其測定装置などを見せて戴きたい」と云つたら、目下生體について股關節の運動を研究してゐるフリーデル氏が説明してくれることになつた。フリーデル氏も獨逸體育大學に行つて學生について研究してゐると云ふ。フィック氏が用ひた装置は小さいが、フリーデル氏のは身長よりも尙ほ大きいものである。明後日頃肩關節の運動の測定をするが見に來ないかと云つてくれたけれども、明日ベルリンを立つ豫定にしてゐるので斷つた。今後生體について運動測定の研究が多く行はれるであらう。解剖學教室を辭した際はフィック氏もコープシュ氏も解剖實習指導に出て室には居なかつた。

轉じて解剖學教室に向ひあつてゐる解剖生物學教室に行き、再びカイベル氏に會ふ。米國に行き誰々に遇つたらよろしくと傳言があつた。それから教室内をもう二十年もここにみると云ふ技術員に詳しく案内して貰つた。ヘルトウイツヒ氏が講義した頃は講義室の演壇の直下から廊下まで聴講者が溢れたことがあるさうである。其時は學生が四百人を超してゐたけれども、只今は三百人であるさうな。「ヘルトウイツヒ氏とカイベル氏とどちらが好人物か」と尋ねたら、暫く考へて「それはカイベル氏だ」と答へた。クラウゼ氏にもちよつと會つた。

カイベル氏のところで金澤の石丸氏が研究してゐる。目下文部省から解剖學を研究に出てゐるものは石丸氏と私との二人だけであると思ふ。

午後五時大使館に行つて先帝陛下の御大葬を遙拜した。續々集つて來る邦人は互に顔を見合せて何とも云へぬ感傷にみちてゐた。

二月八日、午後一時半發の汽車でベルリンを立ち、ドレスデンに着いたのは四時半であつた。途中汽車はしばしば松林の間を通る。故郷を想つた。

二月九日、ゲメルデガレリーに多數の名畫を見、殊にラファエロの「マドンナ」を見たのはもとより大きなよこびであつたが、それにも増してうれしかつたのはアルバーティヌムに古代ギリシャのすぐれた藝術に接したことである。寫眞によつてのみ知つてゐた原作がいま目前に現れたでないか。グリュエスグウエルにも入つたが、高價な裝飾品などあまり私の興味を惹かなかつた。

獨逸衛生博物館と云ふ標本模型製作所を訪ふ。目下フランクフルトで其類の展覽會の開かれてゐることを聞いた。

サクセン體操教師養成所を訪ふたが、別に見るものもなかつた。

午後七時すぎドレスデンを立ち、九時半ライプツヒに着く。

二月十日、朝、解剖學教室に行くと、スバルテホルツ氏は不在、ヘルド氏は講義中で、講師のフアーレンホルツ氏に會つたが、これも講義前であつたから十分間ばかり話をしただけで、此教室に十五年も居ると云ふ人を案内に各室を見て廻つた。標本が多い。骨の標本や淋巴管注入の標本の美しいのが殊に目に立つた。模型も多かつた。屍體は全「サクセン」から集め、一年に百五十以上に達するが、それでも足らぬと云ふ。

教室に來る學生は二百五十人、そのうち四十人は女性である。思ひがけずローストックの解剖學教室から

轉じて来たフースとか云ふ人に遇つた。舊知の人である。講義の間を見てヘルド氏と話したが、スバルテホルツ氏には遂に會ふことが出来なかつた。博物館内を一巡した。

ライプチツヒの市浴場に就て讀んだことがあるので、それを訪れた。主任が親切に各室を案内して説明してくれたが、驚くほど大仕掛で、設備がよく行届いてゐる。室の裝飾も立派である。一年の經費四十萬「マーク」、即ち二十萬圓。市の補助は受けずにやつてゐると誇つた。水泳場は長さ三十五米、幅二十米、深いところは三米以上もある。水の溫度は攝氏二十二度で、一週に一回換へる。水槽浴、灌水浴、蒸氣浴、炭酸浴、電氣浴、電光浴なども出来る。十五分間の全身「マッサージ」を受ける人、鶏眼を除いて貰ふ人、酸性瓦斯を吸入してゐる人なども見られた。犬を洗ふ室もあつた。そこには大小の犬がそれぞれ主人につれられて順番の來るのを待つてゐた。獨逸では犬を飼ふ人が多く、汽車にも時々「犬をつれた旅行者に」と云ふ特別の室を見た。

私が伯林滯在中にスパンダウのプロイセン體育大學を視察して歸るとき、其隣に浴場を見つけて入つたら、主任が一切残らず、機關場まで見せてくれた。水泳場は長さ二十八米、幅二十米、深いところは三米で、水の溫度はやはり二十二度であつた。水は一週に二度換へる。全伯林にこんな浴場が二十近くあるが、これが最も大きいものだ云つた。其時は巡查教習生が水泳してゐた。そこはライプチツヒの浴場ほどの諸設備はないが、一年に四萬「マーク」、即ち二萬圓の補助を市から受けてゐる。「四萬「マーク」の補助を」と私が驚いた顔をしたら、主任は「一日に僅か百「マーク」餘ではないか。一日平均七百人を容れる此浴場には不足である。水浴は市民、殊に貧しい人々の健康に甚だ大切であるにもかかわらず、市は體育運動の方面に多額の金を出しながら、水浴には少額しかくれぬ」と不平を云つてゐた。

---

## 岡山醫學會通常會

本年五月十九日午後三時より岡山醫科大學臨牀講義室に於て開會す。